
嘘吐きの弾丸

武蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘔吐きの弾丸

【Nコード】

N3710Y

【作者名】

武蔵

【あらすじ】

『世界で唯一ISを使える男』織斑一夏。その『発見』に、世界は沸いた。だがしかし、絶対的多数としてISを使えない男は未だに存在している。その一人、たてわき帯刀という名の少年は、高校生とマフィアの鉄砲玉という二重生活を送っていた。そんな中、弟分であった一夏と、妹分であった鳳鈴音がIS学園に入学するとの情報が入る。帯刀は幹部の命令に従い、ボディガード兼話し相手（＝メンタル維持装置）としてIS学園の整備科に編入することとなる。ISに囲まれている中で、生身の人間がISの繰り手を護衛する。

お偉いさんから押し付けられた課題に、チンピラ予備軍（ほぼ素人）は頭を抱えた。無理難題に追われる帯刀。使いどころのない、押し付けられた重装備。象に立ち向かう、ちっばけな蟻である帯刀の明日はどっちだ！メカと少女、というよりも、硝煙とオイル臭い物語。言っなれば、似非ハードボイルド。とりあえず、始まります。

序章

人を殺すのに、武器などいらぬ。究極的に必要なのは、殺そうとする意思だけだ。

銃声が響く中、自らも『敵』に向かつて7・62mm弾を撃ち込みながら、俺はしみじみとそう思った。

それでは、殺意がなければ人を殺せないのか？

殺意もなしに引き金を引き、人を殺している俺は異常であるのか？ 単純に人を殺すということは、物理的にはさほど難しい事じゃない。身体一つで人を殺した例など、調べてみればいくらでも存在する。

けれども、それは本能的に恐ろしいことだと人間は考える。無理もない。同族殺しは、ほぼ世界的なタブーである。だからこそ、そのタブーを打ち破るために、人は常ならぬものを欲するのだ。

例えばそれは、普通とは違う精神状態。殺意であり、それも含めた一つの狂気だ。そしてもう一つは、殺すという行為自体を、どこか遠くのものとしてしまえばいい。

つまり、武器を取るのだ。そうすることで、人を殺すということの罪の意識は希薄となっていく。殺意を生み出す装置として、あるいは殺意を肩代わりする装置としての役割を、武器に持たせたんじゃないだろうか。端的にいえば、武器を狂気の形代かたしろとする。それが、人が争いの中から生み出した知恵なんじゃないかと思う。

結局の所、何が言いたいか。要するに、殺意がなければ武器を取ればいいじゃない。

「文明の利器、拳銃サイコー！」

とりあえず叫ぶ。大声を出したら、耳元を弾丸らしきヤバげなものが掠ったので、慌てて遮蔽物に隠れた。

ここは、東京の某所。ヤクザの隠れ蓑、いわゆる「フロント企業」の自社ビルの中。普段は、一応企業然とした場所だ。

けれども今は、血を血で洗う戦場でしかない。自分の城を守ろうと、拳銃や日本刀、ライフルなんかを携え、侵入者を排除しようと暴力が飛びかっている。

そして俺は、その侵入者側だ。おまけに言うならさらに下っ端、いわゆる鉄砲玉である。

ホールド・オープンした年代物のトカレフにマガジンをぶち込み、スライドを引く。遮蔽物とした壁から腕を出したら、あとは引き金を引くだけの簡単なお仕事です。ただし、銃の暴発と敵からの弾丸にはお気をつけ下さいって所だ。

俺は、軍人ではない。ただのチンピラもどきだ。正規の訓練なんかも受けていない。拳銃だって、前日に呼び出された際に初めてさわった位である。だから射撃の命中率は、数値化すると悲惨なものだろう。けれども運良く、俺が放った八発の弾丸は廊下の先を制圧したようで、俺達に向けられていた火線は沈黙していた。下手な鉄砲は、とりあえず数を撃ちや当たる。先人の金言は、確かに偉大だった。

後ろに控えるご同輩方につつかれ、恐る恐る廊下の先をのぞき込む。三人、床に倒れていた。ダークスーツを着ているため出血は目立たないが、彼らの指先はびくりとも動いていなかった。

再び空となった弾倉を取りかえ、ゆっくりと倒れているモノに近づく。スライドを乱暴に引き、一人一人の頭部に向けて引き金を引き絞る。乾いた銃声が響きわたる。一発ずつ、フルメタルジャケット弾が、頭の中に吸い込まれていった。

そこに開いたのは、想像していたよりも小さな穴だった。派手に頭の中身が飛び散った訳ではない。拍子抜けしたと同時に、そんな事を考える自分に対し吐き気がした。

身体と思考を切り離す。弔いの代わりに頭を蹴っ飛ばし、死亡しているのを確認した。

再びせりあがってきた吐き気を飲み込みながら、思う。油断して後ろから撃たれるのは、単なるマヌケである。そして、命が軽いこんな場所では、どうも間の抜けた奴から死んでいく、らしい。

少なくとも俺はまだ、死にたくはなかった。そのためには、殺すしかないのだ。

せめて後続が踏まないように、足で死体を壁際に寄せた。そして仲間に合図を送り、先へと進む。

それから、ビル内を完全に制圧するには、さほど時間はかからなかった。

ビルからの撤収後、ミニバンに詰め込まれる。ちなみに、行きはマイクロバスに詰め込まれるくらいの人数だった。損耗率せんこうりつはざっと六割ほどだ。

その事実にも顔色も変えず、大哥と呼ばれる上役はもっともらしく『出入り』を論ずる。

「突入から制圧まで30分ってところか。まあ、悪くない」

人数的な損害については、言及はない。おまけに言うならば、突入前、戦闘における目標なんかも聞かされてはいなかった。初対面の面々と言われたとおりに突入し、指示のあった経路で制圧した。それだけである。

ある意味、それも当然であった。突入組は、チンピラ上がりや食い詰めて『組織』に養われている者ばかり。いわば鉄砲玉で、いくらでも補充が利く存在だった。必要のないことを知る意味はないし、それは邪魔になるだけだった。

無論、ここにいるという事は、俺もその一人だ。少々、家庭環境は特殊ではあるけれど。

人の波をすり抜けるように、ミニバンは帰路につく。遅れてきたパトカーのサイレンが、やや間抜けな音でビル街に響いていた。

珍しく晴れた冬の空が、曇ったガラス越しに見えた。夜の空には、触れたら切れそうな三日月が浮かんでいる。金曜の夜、ビル街の中、街行く人々は響くサイレンにも目をくれず、足早に歩いていく。けれどもやがて、現場は野次馬に埋まるだろう。どこにでも、暇人というものは存在するものだから。

しかし、その熱はいずれ冷えていく。今夜の事件も、いずれ忘れられていくのだ。

ぶるり、と背筋が震えた。寒さに抗うように、シヨットのレザーコートにねじ込んだ身体を締め、ジーンズを穿いた脚を抱え込んだ。履いているダナーの黒いブーツがぶつかり、ごっん、と音を立てた。

とりあえずこれで、今夜はおしまい。明日からは日常に戻るのだ。

世は並べて、事もなし。

自分の身に小さき出来事があるけれど、とりあえずはそう言えるようないつもの生活が続く。そう思っていたのだけれど。

所詮チンピラの出来損ないのような立場の俺にとっては、とりあえず現実は無情であるのだ。その事実を、俺は春の訪れと共に思い知る事となる。

時は2000年代初頭。インフィニット・ストラトスなどというマルチフォーム・スーツが一人の天才によって発明され、時代が変わりつつある頃。

そんな時でも、血を血で洗うような暴力組織同士の小競り合いは、未だに続いている。技術がいかに進歩しようとも、プリミティブ（原始的）な暴力は未だ有効な『手段』であった。

世界は、変わっていく。良きにしろ、悪きにしろ。

それでも、ずっと変わらないものもやはり存在しているのだ。良きにせよ、悪きにせよ。

序章（後書き）

ハードボイルド、目指しています。

第一話

横浜中華街がある山下町から山のほうへ向かい、石川町駅を通り過ぎた辺りで、風景はがらりと変わる。観光地の華やかな雰囲気から、雑駁ざつぱくとした集合住宅の群れに。まばらに道を行く人々も目の光が鈍く、町全体が灰色に変わってしまったかと感じられるほどだ。

古くは『ドヤ街』と呼ばれ、日雇いの港湾労働者達が一夜を過ごしていた街。その一角にある、古ぼけたアパートの前。そこに、黒塗りの高級車が停まった。

スモークがかけられた窓が開き、仕立ての良いダークスーツに黒のタイを締め、クリーム色のトレンチを羽織った男が顔を出した。周囲を入念に確認し、満足すると運転手にドアを開けさせる。そんな手順を踏み、男は寒空の下へと降り立った。

自らの懐に手を入れ、暫くまさぐる。男をちらちらと見ていた通行人は、その仕草であわてて顔を背け、足早に歩き出した。

それにも構わず男が引つ張り出したのは、ダビッドフ・マグナムの箱だ。一本引き出し、運転手が差し出したデュポンのライターで火を点ける。美味そうに大きく煙を吸い込み、運転手へと目を向けた。

「少し、時間がかかる。暫く暇を潰していてくれ」

うなずく運転手を尻目に、男はアパートへと向かう。目指すは、二階の一番奥だ。

歩みにあわせて、イギリス製の革靴が金属の階段を叩く。

ドアの前に到着すると、呼び鈴も使わずにドアを乱暴に叩いた。

「おい、帯刀たてわきの坊主。俺だ、さっさと開ける！」

返事の代わりに呻うめくような声が聞こえ、しばらくの後。眠そうな

目をした少年が、ドアから顔を出した。

「何です、陳の兄貴。こちらら昨日の出入りで疲れてるんですけど」

ダルそうな声色に、随分と碎けた話し方。それにも構わず、陳と呼ばれた男はニヤリと笑った。

「よう、起きてたか」

一声だけ返し、陳は、唇の端に張り付いていたダビドフをふかす。そして、こう言い放った。

「突然だが、帯刀の。高校、転校するつもりはねえか？」

「……は？」

唐突な言葉に、少年は間の抜けた返事をした。けれども、詳しい説明の代わりに返ってきたのは、吐き出された煙草の煙だった。

彼の平穏な日常を叩き壊す使者は、煙と共にやって来たのである。

点けっぱなしのテレビからは、昨日東京都内で起きた大規模な暴力団同士の抗争について、ニュースが流れていた。

どうやら、未だ犯人の目星はついていないらしい。

まあ、犯人、俺なんですけど。

テレビから視線を外し、目の前で二本目の煙草に火を点けている男を見る。

名字は陳。子供の頃からの兄貴分のような人であるが、名前は知らない。とりあえずは、オーダーメイドのスーツを着込み、高級ラ

イターと高い煙草を愛する伊達男である。

そして、名前からも分かるように中国国籍であるということ。加えて、マフィアの類の組織でそれなりに高い地位を得ているということだ。

俺がなにかしらの「仕事」をする時も、この人經由で斡旋あつせんされている。

それにしても、今回の話はどういう事だ？

高校受験の際に転居がともなったため、一年経ってようやく新しい環境にも慣れてきたところだ。

世話になっていている身としてあまり強いことはいえないけれど、少しは異議も唱えたくなる。

「さて、真面目な話だ、帯刀の」

美味そうに煙草を吸い終わった陳さんは、ゆっくりとこちらへ目を向けた。

「『世界で唯一のISを使える男』って知ってるか？」

「知ってるも何も。一夏の奴でしょ、それ」

織斑一夏。あの『織斑千冬』の弟。俺より一つ年下で、中学まで住んでいた街でよく遊びまわった相手である。ありていな言い方をするならば、友人、あるいは弟分だ。

「んで、今の中国の代表候補生って、知ってるか？」

「知るわけないじゃないっすか。そんな事」

少なくとも、代表の『候補生』レベルでは『知る人ぞ知る』というほどの知名度はない。興味のある人間は知っている。興味のない俺なんかは、まるっきり知るはずがないのだ。

陳さんは、どうももったいぶるような口調で、その名前を告げた。

「ファン・リンイン鳳鈴音だよ」

おめくり鳳とは、何とも勇壮な姓だ。見当違いのことを考えながら、発音を漢字に直していく。中国語のネイティブという訳ではないので、どうもそこにタイムラグが生じてしまう。

けれども、名前に漢字を当てはめ終えた時には、俺は結構なショックを受けていた。何しろ、俺の中の人名録にも、その名前があったからだ。

ちんちくりんで、すとーんでぺたーん。もう一つおまけにツインテールという、どうもニツチな層にしか対応していないんじゃないかという外見。まさか、そのアイツなのか？

「……アイツ、ですか？」

恐る恐る、聞いてみた。

「うむ。お前も付き合いのある、鳳の家のお嬢ちゃんだよ」

あっさり返答は返ってきた。

俺は、一夏と友人である。ならば、必然的に鳳鈴音とも顔見知りな訳だ。

だが、鈴音の奴とは単なる友人という訳でもなかった。ガキの頃に両親を亡くし、細々と組織の世話になりながら暮らしていた俺は、命令によってボディガードみたいな事をしていた。

というのも、鳳の家に、組織の上のほうにいる人間は何がしかの

縁があつたらしい。それが巡り巡って、日本で暮らす際に不自由をさせない為というお題目で、腰が軽く同年代の俺にまわってきたのである。

もつとも、単なる中学生に大層な事件が起こるわけもない。生活の中で揉め事があれば陰ながら活動し、まあちよつと過保護な兄貴分的な役割をしていたのである。

昨年に分かれた時は、まあいつもの通りちんちくりんだつたのだけれど。まさか、一年足らずで代表候補生となってしまうとは。大したものである。

「んで、だ。織斑のどこにも、ウチはちよつとした縁がある。おまけに、上の幹部連中達は、鳳嬢を猫かわいがりだ。二人に下手なことがあつたらいけない、とのお達しでな」

「んで、俺が編入することになった、と？」

絞り出した声に、陳さんはゆっくりと頷いた。

その様子を見て、とりあえず俺は頭をかき回す。考える。そこにはまだ、穴がある。

とりあえず、落ち着こう。俺は、テーブルの上に転がしていたホープ・メンソールの箱を開け、一本取り出し、手元に引き寄せたジッポーで火を点けた。

吸い込んで、吐き出す。さあ、平穩を護るための戦い、始まりだ。

「本格的なボディーガードなんて、俺にはできませんよ」

「そんな事、期待するはずないだろうっよ。まあ、お前は話し相手兼最後の肉の盾ってところだ」

「いや、それにしてもプロを呼んだほうがいいでしょ、色々と」

「IS相手に生身でガチンコできる奴がいるなら、呼ぶけどな。実質的な警備は、学園の教師達でやっているらしい。何か起こるなんて事あ、そうそうない。せいぜい話し相手をしてこい」

嗚呼無情。バツサリである。だけど兄貴、今何かフラグを建てませんでしたか？

だがしかし、ここで諦めたら試合終了である。

「そのISですよ。一夏じゃないんだから、俺は乗れませんって。どういつ名目で入学するんです？」

「どうも、整備科っていう学科があるらしい。そこならどうにか潜り込める。ついでだから、整備や構造もきっちり学んできてくれると、後々助かるな」

ちなみに俺は、ガチガチの文系だ。なんとも無茶な話である。

「いや、その、第一！ IS学園ってのは、女しか入学できないって聞きましたよ！」

それもそのはず。ISを動かせるのは、女性だけだから。男が入る意味など無い。

「織斑のトコの坊主が入るじゃねえか。ああそう、学園側もそいつのメンタルケアの問題から入学を推奨してくれらってよ」

目の前の男は、言わばマフィアの構成員である。天下のIS学園にどこまでできるかは分からないが、それにしても何か高圧的にねじ込んだに違いない。

けれども、触らぬ神に祟り無し、である。実際のところ、この問題は男一人がどうこうできる範囲を超えている。つまりは、俺なんかが関わることも恐れ多い雲の上の人々が、その権力を最大限に利用したのであって、所詮末端の人間たる俺は、唯々諾々として転校しかないのである。

口の端に銜くわえた煙草から、灰がポロリと落ちる。目ざとく見つけた陳さんは、俺の口元に灰皿を寄せ、それを受け止めた。

そして、ニヤリと笑う。

「んで。転校、しない？」

「……承りました。転校、させて頂きます」

結局のところ、無駄なあがきだったのだ。

今回の話は、事後承諾ですらない。いわば、事後通告であった。こうして俺は、平穏な生活にサヨナラを告げる事となったのである。

そして時間は過ぎ、転入の前々日。世間一般では土曜日だ。

部屋を引き払い、高校の転出手続きも済んだ。大きな荷物はすでに学園のほうに送っていて、手荷物は押し付けられたものを含め、ポストンバッグ一つに詰め込んでいる。

あと持って行きたいものは、一つだけ。側車サイドカー付きのバイク、である。

免許を取って一年も経たないが、俺の持つ唯一の財産だ。乗る機会は無いかもれないが、とりあえず持っていく分には許可が出たので良しとする。

IS学園へのメインの交通手段は鉄道だが、無論それだけでない。輸送や業者用として、ゲート付きではあるが道路は存在するのだ。今回はそこを通る許可をもらい、バイクを運搬するのである。

空になった襪ひざアパートの鍵を閉め、下に住む大家に返す。

季節は四月手前だが、夜になるとまだ寒い。肩をそびやかしながら、羽織ったNATOパーカーの首元をかき寄せた。

手に持った革のボストンを側車に放り込む。ヘルメットを被ると、キーを捻り、燃料コックをONにした。キャブレターのチョークを引き、キックを二回踏み込む。そうしてようやく、俺の愛車たるロイヤル・エンフィールドのブリット350は咆哮をあげた。

時間は夜六時前。少々遅いが、まあ、どうにか許容範囲だろう。

しばらくは縁のなくなるだろうバイクでのツーリングを楽しもうと、短いようで長い旅は始まりを告げた。

そして、走ること一時間。IS学園にほど近い駅にある、シヨッピングモールのベンチにて。俺は頭を抱えていた。

「……この時間から行って、何処で寝ればいいんだよ」

アパートを引き払うのに、何やかんや時間を使ってしまったせいもあり、出発は夕方だった。普通に考えれば、夜も遅くになってから転入手続きなど出来るわけも無く、必然的に寮の部屋に入ることもできない。何となくテンションが上がって出てきてしまったものの、完全なる悪手だった。

「夕飯でも食べて、とりあえずどこかのネカフェにでもしけ込むか」

もう少し戻って知り合いの家に泊まるのも一つの手だが、如何せん急すぎる話だ。いくら社会的にはチンピラもどきであるうとも、心は純粋な高校生である。誰かに迷惑をかけるのは、ちよつと気が引ける。

とりあえず、何か美味しいものでも食べよう。明日から寮生活であり、寮での食事なんて美味しいものじゃないと相場は決まっているのだ。そして、狭苦しいネカフェのリクライニングブースで夜を明かそう。

そう、決めた。そして、俺はやたらと重いボストンバッグを腕にぶら下げ、レストランが集まるエリアへと歩きはじめた。

突然ではあるが、食事にも『原風景』というものが存在するのではないだろうか。

味噌汁でも、何かほかのものでもいい。ふとした時に思い出す味。自分の中に、大切にしまっている食事の風景というものを、誰もが持っているだろう。

俺個人にとつての原風景は、レバニラ炒めと味噌汁であった。香港人の父と日本人の母との間に生まれ、食事についても両者の影響を多大に受けた。傍^{はた}から見ると奇妙に映るかもしれないが、この組み合わせも案外オツなものである。つまるところ、何が言いたいのか。

「……味噌汁、ないんすか？」

「お客様。ここは中華料理店でございます」

ちよつとお高い、中華料理店の中。四人掛けのテーブルを一人で占領した俺は、店員とにらみ合っていた。

「いやいやいや、中華に味噌汁があわないって、誰が決めたんすか」

「お客様。味噌汁は日本の料理です。中華料理店で出すのは不自然でしょう」

成る程、一理ある。だがしかし。

「レバニラは、味噌汁と一緒に食べたいんだ！」

「知るか。他を当たれ」

けんもほろろ、だった。どうやら本当にどうしようもないらしい。それでは、こちらにも考えがある。

「じゃあ、排骨^{パイコ}麺で」

「レバニラはいいのかよ？」

「えっ」

注文をしたら、ドスのきいた声で追加注文を迫られた。店員は同年代の女の子だったが、ちよつと異様な迫力だった。

そして俺は、不本意な注文をするハメになったのである。

やや膨れすぎた腹を抱え、店を出た。

夜も9時近くなると、ショッピングモールを歩く人もぐつと減る。まばらになった足音をぼんやりと聞きながら、俺はこれからどうするか頭をめぐらせた。

一口にネットカフェを探すといっても、その方法は多岐にわたる。

インターネット上の情報を頼みにしたり、あるいは交番や道行く人に聞いてみたり。とりあえず見つけるだけならば、前者でいい。少しでも快適な時間を過ごしたいならば、後者を選ぶ。高校生にして体得した、貧乏旅行の知恵である。

結論。誰かに聞こう。場所を知っていそうな同年代にアタリをつけ、周りをぐるりと見渡した。

しかし、どうも女性が多い。IS学園に近いという、土地柄もあるのだろうけれど。

できるだけ、温和そうな。それでいて、好奇心の強そうな顔を探す。下手なのを引けば、結構なレベルの罵声が返ってくるのは分かっているので、聞く人間の選考は慎重に、だ。

一人の女の子に、目が留まった。やや明るめの茶髪に、フレームレスの眼鏡。温和というより、活発といった風情だ。首からぶらさげた一眼レフが、その印象をより強くさせている。

決めた、あの子に聞いてみよう。

ゆっくりと、近づいていく。警戒させないように、無用な負担をかけないように。

そして、視界に入るのは、正面からでも横からでもなく、相手から見て斜め前から。

「ごめん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。時間いいかな？」

「……はい、なんですか？」

少し、受け答えが硬かった。初対面だから仕方が無い、と自分に言い聞かせ、言葉を継ぐ。

「ここらへんで、良さげなネットカフェってないかな？」

とりあえず一晩過ごせるような、と続けようとしたその時。

忙しい足音と共に、男達の怒号が聞こえてきた。

「待ちやがれ、そのガキやあ！」

一目でガラの悪い人種と見て取れる、黒スーツに派手な柄シャツを着た男達。およそ十人近い人数が、目の前に並んでいた。

見覚えは無い。だから、隣に聞いてみた。

「えーと、お知り合いですか？」

「いーえ、違います」

間髪入れずに答えが返ってきた。横目で見ると、気丈な様子ながらも、ある程度の怯えが見て取れる。

体の位置をさりげなく変え、俺自身が前に来るようにする。ついでに、後ろ手にしたボストンバッグの中に手をつっこみ、必要なものを探す事にした。

そして。やや怯えたような声で、目の前の男達に問いかける。

「あの、すみません。人違いって事はないでしょうか？」

「いや、お前もその女もだ。こっちは、きちんと見覚えがあるんだよ」

その反応に、内心首をひねる。その間もボストンの中を探っていた手が、止まった。細長い、筒状の物体。ようやく見つけた。

キャップをひねりながら抜く。キャップ側を逆手に持ち、マッチを擦る要領で長いほうの本体側を擦り付ける。

そして、甲高い発火音が鳴りはじめる直前に。

「申し訳ないですけど、夜も遅いんでまたの機会にお願いしますよ！」

そう言い放ち、手の中の発煙筒を目の前に投げ出した。煙が、撒き散らされる。

目の端でそれを確認するや否や。俺は目の前の女の子の手を握り締め、走り出していた。

男達の怒号が、一層激しくなる。それを押し潰すような音で、火災報知器が鳴りはじめた。

それに被せるように、ここ最近聞きなれた破裂音が聞こえた。拳銃の類だ。

悲鳴と、さらに激しくなった非常ベルの音をBGMにして。まばらな買い物客の間を、すり抜けるようにして走っていく。

そして、幾度か角を曲がりきると、自動ドア越しに夜の空が見えた。

突き破るような勢いで、ドアをくぐり抜ける。自分のバイクまでは、もうすぐだ。

ふと思い出し、隣の彼女に声をかけた。

「乱暴で悪いな。俺はここからすぐに逃げ出すけど、あんたは何か足はあるのかい？」

「痛たたたた。助けてくれたのはありがたいけど、もう少し、優しくしてくれたらうれしかったかなー」

掴んでいた腕をさすりながら、彼女は最寄駅の名前を挙げた。そこまで行けば、学園に行ける、との事。

「……目的地は、IS学園かい？」

確認の意味も込めて、お伺いを立てる。そうすると、あっさりと肯定の返事が返ってきた。

さて、どうするか。追っ手があの程度で諦めてくれたならば、彼女の言う通りに駅まで送ってさようなら、で済むのだけれど。

もし、諦めの悪いやつらならば

駐車場に甲高いスキール音が響くと共に、黒塗りの高級車とSU
Vが一台ずつ飛び出してきた。

どうやら、諦めの悪い人たちだったらしい。遠からず、街中に監視の人員が散らされる事だろう。

「実を言うと、俺も学園に用があるんだ。お嬢さん、悪いがしばらくツーリングに付き合ってもらってもいいかい？」

今まで使ったことのない、予備のジュエッペルを渡す。走り去る車を見ていた彼女は、こくと頷き、それを被った。

サイドカーに乗るよう指示し、自分のフルフェイスを被る。ぴったりとしたレザーグローブを付け、ジーンズのポケットにあるキーに手を伸ばす。

ふと思いついて、再び自分のボストンバッグに手を伸ばした。中からアウトドアブランドのゴアテックス・ジャケットを取り出し、サイドカーに座る彼女に投げる。

「夜だし、ちょっと飛ばす。俺ので悪いが、念のために着ておいてくれ」

我ながら、こつ恥ずかしい台詞である。赤くなった頬も、フルフェイスのおかげで見えないはずだ。

内心テンパリながらも、いつも通りにエンジン始動の手順を繰り返す。一発でかかったエンジンに機嫌を良くしながらも、今夜はま

だ一波乱あるという予感が頭をかすめた。

「さて、行こうか。つかの間の追いかけてこた」

隣に声を掛ける。少し考え、こつ付け加えた。

「まあ、安心してくれ。ボディガードをするのは、ちょっと慣れる」

嘘っぱちだった。

アクセルを開け、エンジンを吼えさせる。

風を切りながら進み、俺は内心こつ考えていた。つまりは、これなんてエロゲkneg?と。

IS学園の外周のうち、塀に囲まれている部分。そこには、清掃業者や食堂の関係者が利用する道路へと繋がるゲートがあった。

開閉は電磁式。高さは二メートル超。少なくとも、易々と乗り越えられる高さではなかった。見た限りは、そう簡単に破られるものでもなさそうだった。

しかしそれも、鍵が閉まっていたらの話だ。鍵が開いている門など、何の役にも経たずに素通りされてしまう。

そしてその鍵は、今俺の手の中にあった。鍵を開けなければ、中に入れない。

十字路の隙間から顔を出し、門の前を窺う。黒塗りの車が四台、門の横にベタ着けされていた。つまりは、鍵を開けたら、IS学園の中に侵入されてしまう。

控えめに言って、手詰まりであった。

「……ヘイ、その少女。どうすればいいと思う?」

「とりあえず、学園に電話して追い払ってもらうのはどうかなー、少年さん」

サイドカーに座る少女と間の抜けた会話をしながら、教えられたIS学園の代表番号へダイヤルする。

数回のコール音の後、繋がった音がした。と思ったら、留守電の音声が入った。本日は土曜日、おまけに今は午後十時近い。

「……留守電で繋がらないんだけど。他の番号知らないか、そこな少女」

「普通の高校生が、ガツコの番号を暗記してるだけでも褒められるべきじゃないかなーと思うんだよ、少年」

手詰まりだった。

考える。思考停止することは、生きているのではなく死んでいるのと同義である。

考えがまとまる前に、スマートフォンのディスプレイを指が滑り、ある連絡先を選択していた。

「それで、どうにか織斑センセに連絡ついたんだよね？」

「ああ、連絡はついた。けど、なあ」

陳の兄貴経由で、どうにか連絡はしてもらえた。

けれども、こちらの時間が足りなそうだった。続々と、黒塗りの車と人が集まってくる。いずれ、隠れたこの路地も見つかると。時間は、向こう側に有利だった。

「少女よ、ホントに何もやましい事、やってないか？」

「少なくとも、あんな人たちに関わることにはやっていないつもりなんだけど、私。少年はどうなの？」

「まあ、少なくともあの人たちには危害を加えた覚えはないな」

互いに自信のなさそうな顔を見合わせ、力なく笑みを漏らした。

「うち、家族にマスコミ関係者がいるんだよねー。色々ヤバイシマも渡ってるらしいよ」

「まあ、俺もヤクザ屋さん相手に仕事上でぶつかつたことはあるよ」
方向性は違えど、共にとっ捕まって無事でいられる可能性は少ない。ならば、このままでいる事は得策ではなかった。

結局のところ、目の前のゲートを突破するのが一番の近道なのである。

俺は、再びボストンの中を探り、発煙筒を取り出す。残りは六本。半分を手に取り、隣に渡す。

「俺のほうは、とりあえずゲートに近づく時に投げる。そっちは、ゲートを開けている時に適当にばら撒いてくれ」

「りょーかい。使い方も、とりあえず大丈夫」

なら、善は急げだ。まずは一本目、ゲートから遠い場所に放り投げる。陽動だ。

キックし、ブリットのエンジンを始動させる。

二本目は、路地を出る角で。三本目は、ゲートの前の道で。車の間を、掠めるようにすり抜けながら投げた発煙筒は、どこにか目隠しの役割を果たしてくれたようで、無事にゲート前に到着する。

けれども、音はごまかせない。未だ響く単気筒のエンジン音は、ごまかしきれるものではなかった。

投げられる発煙筒。薄い煙の中、ポケットからカードキーを取り出し、身を乗り出してスリットへと通す。ピピッという認証音が、やけに甲高く響いた。

ゲートはゆっくりと音を立て、開いていく。

「発煙筒は、もう品切れか？」

「残念ながら、ね」

ゲートが完全に開ききるのを、待つ理由はなかった。サイドをぶつけながら、ゲートを無理に擦りぬける。

息をつき、ゲートを閉めてやるうとした瞬間、隣から、声が拳がった。

「気づかれたみたい！ ロケット砲みたいなの、担いでるよ！」

後ろを振り向く。確かに、ゲートの隙間から、オリーブドラブに塗られた鉄の筒がこちらに見えていた。そして、それに装填された弾頭は、あまりにも特徴的な形状だった。

「マジかよ、RPGだッ！」

おそらくは、世界で有数を争う知名度の対戦車ロケット弾。それが、こちらに向けられていた。

慌てて、アクセルを開ける。加速しきったところで左足のブレーキを蹴りこみ、地面を滑るように曲がった。そして、発射音が耳をかすめた。

RPG-7の弾頭は、誘導性を持つものではない。どこかで聞いた言葉は眉唾物ではあったが、弾頭は右脇を通り抜け、その数秒後に爆発した。

アスファルトに舗装された道路に、赤い爆発炎が照り返す。軽く呆然とした後、後ろから追いつてるように響くエンジン音に、慌ててアクセルを開けた。

逃げる、逃げる。RPG発射時のバックファイアにでも巻き込まれたのか、追ってきた車は五台ほどだった。

後ろからは、エンジン音と共に銃声が追ってきている。街灯が少ない上、揺れる車から発砲しているためか、とりあえず身体に鉛玉はめりこんでいなかった。

それでも、このままでは逃げ切るのは難しい。

そう判断し、俺はタンDEMシートに括り付けた鞆の中に手を伸ばした。まず取り出したのは、紙箱である。

「悪いが、そんな少女。ちょっとこれ持ってきてくれ」

投げ渡す。慌ててキャッチした姿を横目に、本命を取り出した。

銀色に光る銃身。全体的に大振りな、リボルバー式の拳銃だった。

スミス・アンド・ウエッソンのM500、その4インチモデルだ。

「糞っ、こんな大砲を片手で扱えてか！」

コンペンセイターが付き、ある程度は反動がマイルドとなったといえど、片手で扱うような代物ではなかった。

トカレフの代わりとして、これを渡してきた時の陳の兄貴の得意気な顔が思い浮かぶ。

(なにが、『IS相手だったらこれくらい必要だろ』だ！)

燃えるアスファルトの上を、飛ぶように駆け抜けた。

炎に煽られながらも、左腕と体全体でバイクを押さえ込み、右手でM500を握りこんだ。ハンマーを起こし、シリンダーを回転させる。後ろへ向かって手を伸ばすように、銃の狙いをつけ、引き金を絞った。

瞬間。右手を、爆発したような感覚が襲った。その反動に慌て、バイクのバランスを崩しかけながらもどうにか立て直す。

肩が外れていないのが、不思議なくらいの衝撃だった。当然のように、一発目は明後日の方向へ外れた。

「悪い、大丈夫か」

再びハンマーを起こしながら、隣に声を掛ける。

「大丈夫だけど、終わったらちよつと取材させてくれない？ 私、学園の新聞部なの」

「生きてたら、いくらでも」

そして、大砲をぶつ放す。反動も計算に入れて狙った結果、きちりと炎を乗り越えてきたSUVに当たったようだった。

急ブレーキの音が響く。後続の車はそれに反応できず、衝突音が響き渡った。

バイクを、ゆっくりと停める。ヘルメットを脱ぎ、ハンドルに引っ掛けた。

預けていた紙箱からきつちり五発分の弾丸を取り出し、ポケットに詰める。

NATOパーカの内側にぶら下げていたソード・オフしたショットガンを確認し、鞆から取り出した予備弾薬を、また別のポケットに詰めた。

「様子を見てくる。ヤバそうだったら、さっさと逃げてくれ」

言い捨て、バイクから離れる。十歩ほど歩くと、横転し燃えるSUVの影に、動く人影が見えた。それに反応し、M500を両手で握りしめる。

このままでも、やがてガソリントankに引火して乗員は死にゆくだろう。だがしかし、あの影が武器を持っていたら、今すぐに殺されるかもしれない。俺だけではない。つかの間の相棒だったあの少女も、無残に殺されるかもしれない。

殺されないためには、殺すしかなかった。

右の親指でハンマーを起こし、影に向けた照星を、照門にあわせる。

引き金を引いた。やがて放たれた弾丸は、あの影の主を殺すだろう。俺が死なない代わりに、あの命を奪っていくことだろう。

マズル・フラッシュが眼を灼いた。ほぼ同時に、轟音が耳をつらぬく。

視界が回復した時に、目の前にあったのは。水色のISの後姿だった。

炎に照らされた人影は、まだ動いている。どうやら弾丸は、目の前のISによって防がれたようだ。

けれどもやはり、敵は殺さねばならない。後に禍根を残してはならない。

足を動かし、ISの横をすり抜ける。再びM500のハンマーを起こし、構えようとした瞬間。

「やめんか、馬鹿者」

声と共に、俺の顔面に拳が着弾した。

身体が、つかの間宙に浮く。そして墜落し、バイクのあった場所までアスファルトを滑った。

「ごっつん、とタイヤにぶつかり、ようやく停まる。そのままの姿勢で、アスファルトに大の字になりながら夜空を見上げる。

視界の端に、こちらを案ずるような顔が見えた。

「ちよつと少年、大丈夫なのー？」

「……ものすごいいたい」

身体は、無駄に頑丈なコートのおかげで問題ないが、殴られた顔面の痛みはしばらく消えそうになかった。

胸ポケットから、ホープ・メンソールを取り出す。ジーンズのウオッチ・ポケットに突っ込んでいたスターリング・シルバーのジッポーを取り出し、火を点けた。

上体を起こし、歩いてくる影に目を向ける。

休日だというのに、黒いスーツ姿だ。女性にしては、少し背の高い姿。特徴的なヘアスタイルに、鋭い目。日本が誇る『ブリュンヒルデ』、織斑千冬であった。

「ども、お久しぶりです」

「ああ。こんな騒ぎを起こしてくれなければ、素直に歓迎してやったものを」

怒ってらっしゃる。まあ、当たり前だ。けれども俺は、みみっちい自己弁護を試みる。

「俺には、こいつらの見覚えはありません。そんな少女の関係者じゃないかと。あと、正当防衛ってことで、一つヨロシク」

「ちよつ、その言い方はないでしょう！」

私を売ったのか、と言わんばかりの目で睨みつけてくる少女を尻目に、揉み手をしながら愛想笑いを浮かべる。

織斑（姉）はそんな様子に、深いため息をついた。

「あいつらについては、今更識のところで調べさせている。お前達に与える罰は、それから決める」

そこまで言っつて、目の前の女性は俺に鋭い目を向けた。

「だが、お前のやったことは、結果的には未遂ではあるが正当防衛とは言い難い。申し開きがあれば、するといい」

織斑（姉）ではなく、その奥に目を向けた。燃えていた火は消えたようつで、すでにいくばくかの人員が車の乗員を引つ張り出し、拘束する作業を行っていた。

その中で、こちらを見ていた少女と目があつた。水色のISを纏つた、先ほど目の前に立つた子である。彼女は、確かにこちらに悪戯っぽい視線を向けていた。

何となく目礼し、焦点を手前に戻す。

「殺さなければ、殺されていました。俺一人ならばまあ、尤もな理由があれば殺されても文句は言えない。けれど、たまたま拾ったあの子が殺されるのは、どうにも我慢がならなかった」

我ながら、醜い話だった。俺は、誰かを殺す理由をも、他人にかこつけている。

許しがたい、情弱であった。

織斑（姉）は、暫く俺の顔を見つめていた。その目を、俺もぼんやりと見つめ返していた。

口の端に銜くわえた煙草から、紫煙がたなびく。

静かな、にらみ合い。それを破ったのは、報告の声だった。

「織斑先生。救助を完了しました。重傷者は三名。その他は軽傷です。いずれも、致命的な状態ではありません」

「ご苦労、更識」

報告した声の主に、目を向ける。水色の癖っ毛、悪戯っぽい視線。先ほど、水色のISを纏っていた少女だった。

「それで、奴らについて調べはついたか」

「詳しい動機は、警察の取調べを待つしかありません。けれども、所持品から、東京都内に本拠を置く暴力団の関係者であると思われる」

告げられた団体名には、聞き覚えがあった。最近、ニユースでよく聞く名前である。何でも、自社ビルに力チ込みをかけられたという内容で

喉が、ヒュツと音を立てた。鋭く吸い込んだ煙草の煙に、俺はひどく咳き込んだ。

聞き覚えがあるはずだ。なぜならば俺も、力チ込む側の一員だったのだから。あの夜、トカレフの弾をばら撒いたツケ、それが回ってきたらしい。

顔が、一瞬で青ざめた。俺のせいだ。俺が、彼女を巻き込んだのだ。

『ごめんッ！』

謝る声は、何故かステレオで響いた。

もう一方の声の主は、まだサイドカーに座る、眼鏡の少女だった。

「えと、俺がちょっとやらかしたせいだと思っ」

「いや、私もちよっとした揉め事があって」

「成る程。つまり、お前ら二人共ががこの原因というわけだ」

困惑と共に交わされる会話に、氷点下の声が割り込んだ。

「罰は、後に伝える。とりあえずは、兩名ともに学園内の指導室に顔を出せ。」

織斑（姉）の出頭命令には、頷くことしかできなかった。

やがて、パトカーのサイレンが響いてきた頃。必要のない人員は学園に戻るように、とのお達しがあった。

いつの間にかフィルターまで焦げていた煙草を携帯灰皿に放り込み、新しく火を点ける。

俺は、気の抜けたようにサイドカーへ沈み込む少女に、声をかけた。

「とりあえず、お疲れってところか」

「うん。お疲れさま」

無言の時間が、つかの間続いた。それを破ったのは、脇から首をつつこんできた、水色の少女の声だった。

「薰子ちゃん、怪我はない？」

「お疲れ、たつちゃん。大丈夫だよ」

眼鏡の少女と彼女は、親しげに声を交わしている。こうなると、部外者は黙るしかない。煙草の煙を吸い込みながら、俺はぼんやりとしていた。

「忘れていた。帯刀、^{たてわき}校内は禁煙だ。ついでに、ガキの分際で煙草を吸うな」

不意に、口元に軽い衝撃。銜^{くわ}えていた感触がない。煙草が吹き飛ばされたのだ、と思いつくと同時に目に入ったのは、巨大な刀の刃先であった。

その向こうには、織斑（姉）の鋭い目があった。

「了解です、織斑先生」

「よろしい。ついでに、その二人もIS学園^{こい}の学生だ。巻き込んだ詫びとして、自己紹介の一つでもするんだな」

そう言い捨て、その背中が離れていく。響くパンプスの音をBG Mに、俺達は口を開いた。

「更識 楯無。二年生。ここの生徒会長よ」

「黛 薫子です。同じく二年生だけど、整備科所属。新聞部の副部長をやっています」

二対の目に、じっと見つめられる。彼女いない暦11年齢の人間としては、ちよっと気圧される光景だった。

だが、圧力には屈しない。

「帯刀だ。横浜の高校から、ここの整備科へ編入することになった。同じく二年生。どうか、よろしく頼む」

「お名前は？」

あえて言わなかった名前について、突っ込まれた。

渋々、口を開く。笑いはコミュニケーションの潤滑油であると、割り切らねばならない。

告げた、名前。いわゆる、珍名記名であった。

それを聞いた彼女達は、夜道に華やかな笑い声を響かせたのだ。た。

ともかくも、これから。俺のIS学園での生活が、始まることになる。

第一話（後書き）

『側車付きのバイク』

『暴漢から少女を助ける』

『RPGだッ!』

『ハンド・キャノン』

もっと言えば、『組織』『構成員』

これ全て、いわゆるロマン粹です（笑）

11/10、本文改稿。口調訂正。

11/16、一部訂正。『笑いは会話のコミュニケーション』って
何ぞ。

Appendix 01 『荷物検査』(前書き)

字数調整のため、閑話的な意味で投稿。

Appendix 01 『荷物検査』

小鳥の囁る声ささやくに、目を覚ます。

小さな窓から入ってくる光が、瞳を強く刺した。

一夜明け、俺は学園の自分に割り当てられた部屋にいる。

ベッド・サイドのテーブルにある煙草に手を伸ばし、火を点けた。そして、細長い部屋の中を、ぼんやりと見回す。

どうにか生活できるだけの寝具類、最低限の調理器具はあるものの、その他はダンボールが山と積まれているだけ。

転入の申請は、昨日サイン一つだけで済んだ。今日は、この荷物をどうにかするのが、仕事となりそうだった。

白く燃えた灰を、クリスタル製の灰皿に落とす。これを吸い終わったら、顔を洗いにいく。

ベッドから抜け出す。朝食代わりの菓子パンを、床に放り投げていた袋から取り出した。昨日のうちに買い込んでいそれは、突然のカー・チェイスのおかげで見事に潰れていた。

腹立ち紛れに煙を吐き出し、短くなつた煙草を灰皿で押し潰して火を消した。

床に脱ぎ捨てたタイト・ジーンズに、脚をねじ込む。グレーのVネックカットソーに、洗いざらしの白シャツを羽織った。そして、荷物の中からハンド・タオルを引っ張り出し、首にかける。

あいにく、この部屋にはトイレはない。キッチンはあるが、折角ならば顔を洗うついでに諸々を済ませてしまおう。

裸足でフローリングの上を歩き、三和土たたきのサンダルを引っ掛けて、玄関のドアを開ける。目の前に広がるのは、青空をバックにしたグラウンドだ。

ドアを閉め、もう一度細長い『部屋』の外側を見回した。それは、船舶用コンテナを置いた、いわゆるコンテナ・ハウスである。断熱材は入っているが、エアコンの類はついていない。夏と冬が地獄であることは、もはや規定路線であった。

確かに、俺がここに来ることは、急に決まったかもしれない。ポデイガードもどきとしては、下手に他の生徒の目に晒される『寮』という空間での生活は、不適かもしれない。それにしたって、この扱いはないと思うのだ。

どうせ一夏の奴は、その希少価値を十分に利用して寮で生活するのだろう。おまけに、聞くところによると寮は相部屋らしい。そしてあいつは、妙にモテるその性質を最大限に利用して、どうせ同室の女の子とイチャつくんだらう。正に、羨ましいの一言である。

口の中でぶつぶつと不満を吐き出し、学園のドアを開けた。休日ということで、薄暗い廊下は差し込む日光だけに照らされていた。サンダルのゴム底がりノリウムの床を叩いて、その音がペタンペタンと廊下に響いている。

やがて、目的地に着く。今年度までは女子高めいた空間だったらしく、いわゆる『男性用』のものは非常に少ない。数えるほどしかない男性用トイレなど、真新しくきれいなものだ。

丸と三角が組み合わされた青いマークのドアを肩で押し開け、鏡の前に立つ。ポケットから歯ブラシを取り出し、雑に歯磨き粉を塗りたくる。

口にそれを突っ込んだ瞬間、強烈なミント感が口中を飛び回った。感じるのは、ひりひりするのを通り越し、激辛の料理を口に入れたような痛みばかり。

よりはつきり言つと。舌の感覚が、無くなっていた。

「……『激烈、爽快感！』^{オト}雄の目覚め！』、失敗だったかもなあ」

毎日使う歯磨き粉に奇をてらった時点で、失敗であった。けれど
も開封したばかりであり、このまま捨てるのも忍びない。俺はチュ
ーブのラベルと覗めっこしながら、厄介払いの方法を考える。

結論は、すぐに出た。一夏の奴に押し付けよう。

後日、無理やり押し付けたこの歯磨き粉のせいで。一夏だけでは
なく様々な女性陣もこの痛みを味わうことになるとは、今の俺には
知る由もなかった。

部屋に戻り、自販機で購入した牛乳で菓子パンを流し込んだ。珈
琲でも淹れようか、と生活用品を詰めたダンボールを漁る。砂時計
状のドリッパーに手が触れた、その瞬間。

インターフォンが、不意の来客を告げた。

ドアを開くと、刺すような鋭い目に、眼鏡越しの視線が二つ。そ
れに、悪戯っぽく観察するような視線も一つ。織斑（姉）と昨日の
少女二人に加え、背の低い童顔の女性が一人。その童顔で緑髪の女
性は、ロリ巨乳眼鏡っ娘であった。眼福。

「織斑センセ、何か御用で？」

「荷物を見せろ。過剰な危険物がないか、確認する」

その瞬間、俺は確かに安堵した。荷物検査をする、というのにだ。
女性に見られたら気まずい雑誌類は、引越し前に資源回収へと出
した。映像メディア類は、とりあえず友人に全部押し付けた。後残
っているのは、ノートパソコンと外付けのハードディスク・ドライ
ブのみであった。いくらなんでも、この中まで見られることはある
まい。

ちなみに、詰まれたダンボールの中には、俺も知らない荷姿のも
のがたくさんある。

おそらくは、陳の兄貴を含めた『組織』からのブツに違いないだろう。

俺がドアの脇によけると、彼女達ははずかずかと部屋の中に入っていった。少しは、遠慮をしてくれないものだろうか。

ため息を一つ吐き、俺は彼女達に声をかけた。

「とりあえず、珈琲でも飲みながらやりませんか？」

異論は、無かった。俺は、琺瑯ホロウのポットを火にかけ、ブルー・マウンテンをハンドミルでゴリゴリと挽きはじめるのだった。

五人分、それぞれの傍に珈琲カップを置いて、荷物の開梱作業が始まる。

まず目に付いたのは、直に配達会社の伝票が貼り付けられたゴルフバッグであった。

「何なんでしょうか、これ」

「さあ、何でしょう。とりあえず、開けてみますね」

先ほど自己紹介を交わした緑髪の女性、山田先生と顔を見合わせ、俺はそれを開ける。

そこには、ゴルフクラブが十四本。しかもどれも同じ、ステンレス製の一番ウッドであった。

一同、無言になる。

「何かあったときは、これで殴れってか」

「次ッ！」

俺のぼやきに被せるように、織斑（姉）の怒号が響き渡った。それに応じて引っ張り出したのは、平べったい形をしたダンボールである。

その中には、的となる円盤と、銀色に鈍く光る金属製の矢が入っていた。

それを見た薫さんが、俺に話しかける。

「これ、ダーツだっけ、少年」

「ハードダーツだな。こんなナリだけど、金属製なんで人に刺さるぞ、少女よ」

「たしかに、武器といえば武器ですけど……」

「次」

山田先生のフォローに被さるように、再び次を促す声が響き渡った。

引っ張り出したのは、ジュラルミン製のケース。それを開けると、分解されたライフル銃が入っていた。

それを見た織斑（姉）は、ようやく安堵するような声を漏らした。

「バレットM95か。まあ、こんな所だろうな」

「帯刀くん、だっけ。こんな物、どうやって仕入れてきたのかな？」

「俺が聞きたいよ、会長さん。多分、香港あたりを経由してきたん

だろうけど」

五十口径の対物ライフル。これ位ならば、ISにも少しはダメージを与えられるだろう。そう思考しかけ、あわててその考えを投げ捨てた。

「いやいや、俺は、単なるボディガードもどきだったはずだ。ISなんぞとドンパチやる必要はない。よって俺には、無用の長物であるハズだ。」

織斑先生から、地下で射撃練習くらいはさせてやる、とのありがたい言葉をもらった後。俺は、最後に残しておいた二個口のダンボールに手をかけた。

一つ目の梱包を引き剥がす。中には、油紙に包まれた長方形のかわらじりたまりが煉瓦状に積まれていた。

一つを取り出し、油紙を破り開ける。中から出てきたのは、オフホワイトの粘土のような物体だった。

「おっどろいた。これ、C4よ」

「…… たつちゃん、C4ってなーに？」

「爆薬だよ、小娘ども」

その声にずざつと音を立て、壁際に移動したのは二名。山田先生と、黛さんであった。

「山田君。爆薬であって、爆弾じゃない。というか、君が離れてどうするんだ」

「二人とも。このままじゃ爆発しないから、そんな離れなくても大丈夫よー」

苦笑しながら声をかける、織斑（姉）と生徒会長。その声に後押しされるように、二人は戻ってきた。

一方俺は、軽く腰が抜けていた。

少なくとも、こんなのは俺みたいない鉄砲玉に扱えるシロモノではなかった。

「一体、こんなんで何をさせるつもりなんだよ、陳の兄貴」

「ボディーガードだろう。少々、理解に苦しむチヨイスだが」

俺と織斑（姉）は、顔を見合わせてため息を吐いたのだった。

ちなみに、もう一つのダンボールにもC4が満載だったことは、言うまでも無い。

Appendix 01 『荷物検査』（後書き）

タイトなジーンズ ねじ込む

洗いざらしの白シャツ 少女漫画的なアイコン

武装なんてこんなもんです。人に対しては重装備。ISに関しては
ほぼ無力。

伊達と酔狂で適当に選んだ装備類。まあ、最近は戦争するのかつて
重装備を持つてる暴力団も増えてきたようなので、こんなんでも大
げさではないんじゃないか、なんて思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3710y/>

嘔吐きの弾丸

2011年11月17日12時48分発行